

前期課程および後期課程とも、学部に比べてマルチメディアを利用した授業は少ない。教室の設備としてのCD・DVD再生機器やPCと接続可能なプロジェクタおよびスクリーンなどの環境は整っている。

インターネットを利用した授業運営についての実績は皆無に等しいが、レポートなどの様式をホームページからダウンロードさせるなど、若干ではあるが試みがなされている授業も存在する。

「遠隔授業」については、前期課程および後期課程のいずれにおいても実績はない。

(点検・評価の結果)

「講義」「演習」「実習」の各形態すべての科目が、その授業目的を達するに適切な規模で実施されている。特に「教会実習」「臨床牧会実習」は、いずれも教会や福祉施設などにおける専門的職業を目指す学生たちにとって必要不可欠な科目となっている。このような実践的な科目の内容や評価における手続などにおいては、協力先(受け入れ教会・病院)との連携を欠くことができない。そのあり方を検証する時期にきている。

さらに、実習病院の幅を広げたり、福祉施設や各種キリスト教関係団体でのインターンシップは、今後の実習科目の展開として検討に値する。

後期課程の授業は「講義」および「演習」の形態があるが、遠隔地ですでに専門的職業に従事している者もあり、その教育方法や研究指導の方法について検討の余地が残っている。

マルチメディア・インターネットを利用した授業運営に関して、まずはそれらを用いて何ができるのかを検討しなければならない。とくに後期課程においては遠隔地で伝道者として就業する者も多く、効率的な利用方法を見出すことが必要である。

(改善の具体的方策)

前期課程における実習科目において、事前・事後指導をさらに充実するとともに、スーパーバイザーとの連絡、協力先機関との連携を密にするための施策を検討する。

インターンシップ制度として、新たな展開を目指した実習協力先機関を求める。

後期課程において遠隔地にいる学生のための出張指導実現の具体的方策の検討を行う。また、神学研究会の地方開催や教職セミナーの地方巡回方式による授業や研究支援を行うことの可能性を検討する。

マルチメディア・インターネットの利用に関しては、単に講義内容のスライド化など視覚的な利用に留まらず、学生の資料収集、研究発表、論文作成のプロセスの一助となるような利用方法を検討する。

1.2.3.4 教育成果のあり方

【評価項目 6-4-1】 教育効果の測定

(必須要素) 教育・研究指導の効果を測定するための方法の適切性

(選択要素) 修士課程、博士課程修了者(修業年限満期退学者を含む)の進路状況

(選択要素) 大学教員、研究機関の研究員などへの就任状況と高度専門職への就職状況

【評価項目 6-4-2】 厳格な成績評価の仕組み（成績評価法）
（必須要素）学生の資質向上の状況を検証する成績評価法の適切性

＜2003年度に設定した目標＞

教育・研究指導の効果を測定するための方法を検討し、導入する。

（現状の説明）

前期課程は、キリスト教界において指導的な地位に就くことができるような高度職業人の育成を目的とし、実際に修了者の大半は、教会、学校、病院、社会福祉団体などに就職し、各方面から高い評価を得ている。この点から、前期課程においては、教育・研究指導の成果が上がっており、これをもって教育の効果を測定している。

【進路状況・前期課程】

2004年度 修了者11名

進路：専門的職業従事者（伝道者） 7名
うち、牧師・伝道師 (4名)
病院チャプレン等 (1名)
教育職員（宗教科） (2名)
その他教会・病院関係 2名
後期課程進学、その他 2名

2003年度 修了者5名

進路：専門的職業従事者（伝道者） 5名
うち、牧師・伝道師 (5名)

2002年度 修了者13名

進路：専門的職業従事者（伝道者） 11名
うち、牧師・伝道師 (10名：うち1名は後期課程進学)
病院チャプレン等 (1名)
後期課程進学、その他 2名

後期課程は研究者育成を主な目的としている。博士論文の作成、学位の取得がその成果を測るひとつの方法となるが、数はまだ多くない。

【進路状況・後期課程】

2004年度 満期退学者 3名

進路：専門的職業従事者（伝道者） 2名
うち、牧師・伝道師 (2名：うち2名は大学院研究員)
大学院研究員 (2名)

2003年度 満期退学者： 4名

進路：専門的職業従事者（伝道者） 3名
うち、牧師・伝道師 (3名：うち1名は大学院研究員)
大学院研究員 (1名)

2002年度 満期退学者：	1名
進路：専門的職業従事者（伝道者）	1名
うち、牧師・伝道師	(1名)

（点検・評価の結果）

前期課程における教育・研究指導の効果は、修士学位の取得、就職状況によって測定できていると言える。一方で、このような測定は印象に基づくものになりやすい点を注意する必要がある。

後期課程においては、課程によって学位を取得する学生が出ていないことから、教育・研究指導の成果を測定する方法を導入し、学位取得に向けて指導を徹底させる必要がある。

学会での研究発表や学術誌における論文の執筆に具体的な成果を挙げつつあるが、いまだ学位取得には至っていない。一方ですでに牧師である学生が、リカレントの場として入学してくるケースも多いが、こういった学生に対する成果の測定法については現段階で検討されていない。

（改善の具体的方策）

1. 前期課程は、成果測定のためのより客観的な指標の導入を検討する。
2. 後期課程は、継続的に学位取得へ向けての指導を徹底すると同時に、それに至るまでの研究活動（研究発表や論文執筆）における客観的な評価指標を整備する。
3. リカレントの場としての後期課程在学学生に対する成果の測定法について検討をはじめめる。

1.2.3.5 教育の質の向上

【評価項目 6-5-1】 教育改善への組織的な取り組み（教育・研究指導の改善）

- （必須要素） 教員の教育・研究指導方法の改善を促進するための組織的な取り組み状況
- （必須要素） シラバスの作成と活用状況
- （必須要素） 学生による授業評価の活用状況
- （選択要素） 学生満足度調査の導入状況
- （選択要素） 卒業生に対し、在学時の教育内容・方法を評価させる仕組みの導入状況
- （選択要素） 高等教育機関、研究所、企業等の雇用主による卒業生評価の導入状況

<2003年度に設定した目標>

1. FDに関する研修会を、引き続き開催する。
2. シラバスの作成を徹底化し、シラバスに基づく授業運営を行う。
3. 神学部において行われているものと同等の授業評価を、神学研究科においても行う。

（現状の説明）

1. 大学院教務学生委員が中心となり、神学部と合同でFD研修会を行っている。
2. シラバスは作成されている。その内容は、「講義目的」「各回ごとの授業内容」「授業方法」「教科書・参考文献」「成績評価方法・基準」「授業学習等についての具体的な指示